

日本における多文化教育の実態と今後の課題

田 中 圭 治 郎

〔抄 録〕

多くの異文化を持った子どもたちを受け入れている学校現場において、多くの教師たちはどのように彼らと対処したらよいか悩んでいる。良心的、教育熱心な教師ほどその悩みは深いものがある。本稿では、国際理解教育の実践と在日外国人の教育実践の中から、多様な価値観、文化を保持している子どもたちの教育、つまり多文化教育とは何かを把握し、真の他者理解とは何か、人と人との真の理解とは何かを、学校教育に焦点を当てて述べていく。一人ひとりを生かすことが教育の本質であるとなれば、多文化教育は、いろいろな人たちの価値観を認めあうため、日本の学校教育に積極的に受け入れなければならないものであろう。

キーワード 多文化教育、国際理解教育、異文化理解教育、帰国児童・生徒教育、在日外国人教育

1 教育現場における多文化教育

現代は人間不信の時代である。日常的な営みの中で、予測不可能な人間関係が頻繁に表出する。人間信頼の前提が容易に崩壊するのである。ユダヤ人思想家マルティン・ブーバーは、名著『我と汝』の中で、人間関係には「我とそれ」(Ich-Es)の関係と、「我と汝」(Ich-Du)の関係の2つがあり、「我と汝」の関係こそが、真の人間関係であるとした。「我とそれ」の関係は、相手を「それ」、すなわち唯物論として捉えたものであるとし、「一面的、一方向的あるいは静止的かわり」での関係であるとする。つまり、町を歩いており、すれ違う人は人間関係の全くない人物であるため「それ」である。私はその人物を「もの」としか見ない。私が相手を一方的に眺めるのであり、両者の間には温かい人間関係は存在し得ない。

「我と汝」の関係は、「出会い」、「対話」とも言われ、相互交流的、相互理解的な人間関係である。相手との心と心のつながりを確立した後は、私は相手を人間存在として認め、精神的なつながりの上に立って交際をするのである。

教育現場においても、斎藤喜博の言葉を借用すれば、子どもたちが「のっぺりとした」顔に見えるのは、「我とそれ」の関係であり、子どもの顔が浮かび上がってくるのは「我と汝」の

関係なのである。現在、いじめが学校現場では大きな問題となっているが、これは、相手を物体化した結果である。相手の人間存在を認め、相手の生き方を認める立場からはいじめは生じない。相手の立場に立ち、相手の尊厳を認めることが必要なのである。

価値観が多様化した現代社会において、学校も例外ではない。いろいろな考え方の子どもたちが存在し、彼らは衝突・葛藤を繰り返しながら、お互いを認め合おうと努力している。お互いの価値観の違いを乗り越えようと試行錯誤を繰り返しているのである。

多くの異文化を持った子どもたちを受け入れている学校現場において、多くの教師たちはどのように彼らと対処したらよいか悩んでいる。良心的、教育熱心な教師ほどその悩みは深いものがある。本稿では、国際理解教育の実践と在日外国人の教育実践の中から、多様な価値観、文化を保持している子どもたちの教育、つまり多文化教育とは何かを把握し、真の他者理解とは何か、人と人との真の理解とは何かを、学校教育に焦点を当てて述べていく。

2 国際理解教育の実践

国際理解教育は3つの分野に分けることができる。まず最初は異文化と全く接したことがない子どもにいかん異文化を理解させるのかという（a）異文化接触のない子どもたちのための国際理解教育であり、2番目は、（b）帰国生徒を受け入れるのための国際理解教育であり、3番目は、（c）異文化を持った子どもたちのための国際理解教育である。

（a）異文化接触のない子どもたちのための国際理解教育

神戸市では異文化ふれあいチューター制度があり、総合的な学習を視野に入れて、異文化を理解する教育に力を入れている。子どもたちは、通年あるいは半期にわたり、「異文化ふれあいチューター」と共に様々な活動をもつ。話したり、遊んだり、学んだり、継続したふれあい体験の中から、国や民族、言葉や生活習慣の違いを越え、互いに個として尊重し合うことのすばらしさを学ぶことができる。また、違いの乗り越え、互いに理解し共感するためには、積極的に、自らを話し、共感的に相手の話を聞くことが大切であることを知るのである。

神戸市千歳小学校では、フィリピン出身のカルロス・マリア・レイナルスさんを「異文化ふれあいチューター」にむかえ、国際理解教育を行っている。次に千歳小学校の教育実践を紹介する。

（1）主題 1年生 生活科 「つくろう あそぼう」

（2）学習計画（全9時間）

〔みんなであそぼう〕 3時間

日本の昔からの遊び

フィリピンの遊び・・・・・・・・・・本時

いろいろなあそびをしよう

[つくってあそぼう] 6時間

おもちゃをつくろう

いろいろなおもちゃであそぼう

そとであそぼう

(3) 本字の活動

①目標 ・フィリピンの遊びを楽しむ

・フィリピンの遊びを知り、日本の遊びと同じ所や違うところを見つける

②展開

児童の活動	チューターの動き	担任の動き
1. フィリピンの遊びを知り 日本の遊びと比較する	実物をもとに、フィリピンの遊びを紹介する	今までにした遊びや、前時にした日本の遊びを思い出させる
2. 貝殻のゲームをする ・日本のおはじき遊びと同じであることに気付く ・グループに分かれてゲームをする	ゲームの仕方を説明する ・各グループを回る	日本のおはじき遊びを思い出させる ・ゲームの仕方の分からないグループの補助をする
3. 輪ゴムのゲームをする ・日本にはない遊びだということに気付く ・グループに分かれてゲームをする	ゲームの仕方を説明する ・各グループを回る	日本のおはじき遊びを思い出させる ・ゲームの仕方の分からないグループの補助をする
4. 遊んだ感想を発表する		

授業を終えての教師たちの感想は、「根幹は生活科の授業と言うことだったが視点を変える」とチューターの授業というのはいろいろな教材の中に取り入れていくことが可能ではないか」や「子どもたちはフィリピンだけでなく、他の国にも興味がでてきたようだ。また、職員室で授業の打ち合わせをしていると、他の先生も加わって、伝承遊びなどの話して盛り上がった」といったより前向きな評価が多く、従来教師たちがやってきた国際理解教育に大きなインパクトを与えた授業であったことがわかる。

次に六甲小学校における実践例を紹介してみる。

講師は、カナダ出身のダニエル・アンドリュース先生であり、5年生の国語科「一秒が一年をこわす」という内容であり、地球の環境について話し合おうというテーマで、環境の重要性が論議されている。学習の概要としては、「一秒が一年をこわす」を学習して、それぞれの子どもが、地球の環境について問題意識を持つことができた。ここでは学習のまとめとして、森林の伐採による砂漠化や酸性雨が深刻な問題になっているカナダの様子をダニエル先生に開設してもらい、考えを出し合った¹⁾。

千歳小学校、六甲小学校の実践は、外国人を講師に迎え、彼らの立場でいろいろな内容が教えられている。日本人の教師とは異なった価値観の内容が子どもたちに大きな刺激となったこ

とは事実である。

(b) 帰国生徒を受け入れるための国際理解教育

表 1 は神戸市における平成 10 年度の帰国児童の実態である。29 名中 8 名が日本人学校・幼稚園に通学しており、20 名が現地の小学校、幼稚園に通学、通園していることがわかる。また 14 名はアメリカの滞在経験があり、ヨーロッパは 6 名、オーストラリアは 2 名、アジアは 8 名であり、英語圏からの帰国生が半分以上を占めている。

具体的な事例として O さん（女子）の場合を紹介してみる。平成 10 年 7 月アメリカから編入（現地幼稚園のみ経験）であり、現在帰国 1 年目を経過している。保護者からの要望は、日本とアメリカでは習慣の違いが多々あり、アメリカでは当たり前のこと（例えば、立ち食い、授業中のあぐら座り）が、日本では行儀が悪いといわれていることに、本人は気付いていないようであるので、学校での指導を希望している。帰国児童の方は、初日は、アメリカと違い、クラスの人数に圧倒されたようで、とても表情が硬かった。アメリカでは 1 クラス 20

表 1 帰国児童の実態（平成 10 年度）

学年	性別	滞在国内	滞在期間	滞在時の年齢	滞在国内の学校	日本語
1	女	香港	3 年 7 か月	◇2 歳～6 歳	日本語幼稚園	○
1	女	アメリカ	4 年 6 か月	◇1 歳～5 歳	現地幼稚園	◎
1	女	アメリカ	1 年 0 か月	◇4 歳～5 歳	現地幼稚園	◎
1	女	アメリカ	4 年 6 か月	◇1 歳～6 歳	現地幼稚園	◎
2	男	台湾	5 年 7 か月	◇0 歳～5 歳	現地幼稚園	○
2	女	タイ	5 年 9 か月	◇0 歳～6 歳	現地幼稚園	○
2	男	アメリカ	3 年 0 か月	0 歳～3 歳	現地幼稚園	◎
2	男	アメリカ	1 年 6 か月	◇4 歳～6 歳	現地幼稚園	◎
2	女	イギリス	1 年 6 か月	2 歳～4 歳	現地幼稚園	◎
2	男	ドイツ	4 年 3 か月	◇3 歳～7 歳	日本人学校（幼小）	○
3	男	オーストラリア	1 年 0 か月	5 歳～6 歳	現地幼稚園	◎
3	男	アメリカ	2 年 8 か月	2 歳～5 歳	現地幼稚園	◎
3	女	ドイツ	5 年 6 か月	0 歳～5 歳	現地幼稚園	○
4	女	ドイツ	4 年 2 か月	◇6 歳～9 歳	日本人学校（小）	◎
4	男	タイ	4 年 9 か月	1 歳～6 歳	現地幼稚園	◎
4	女	アメリカ	1 年 0 か月	5 歳～6 歳	現地幼稚園	◎
4	男	アメリカ	1 年 0 か月	◇7 歳～8 歳	日本人学校（小）	◎
4	女	中国・アメリカ	5 年 10 か月	◇3 歳～9 歳	現地校（幼小）	◎
4	女	イギリス	2 年 3 か月	3 歳～5 歳	現地幼稚園	◎
4	女	アメリカ	4 年 0 か月	◇3 歳～7 歳	現地校（幼小）	○
5	女	アメリカ	2 年 11 か月	◇5 歳～8 歳	日本人学校（小）	◎
5	男	台湾	7 年 9 か月	◇1 歳～8 歳	日本人学校（小）	○
5	男	ドイツ	3 年 7 か月	3 歳～7 歳	現地校・補習校	○
5	男	アメリカ	1 年 6 か月	0 歳～2 歳		◎
5	男	オーストラリア	4 年 9 か月	◇3 歳～8 歳	日本人学校（小）	◎
5	男	マレーシア・アメリカ	5 年 8 か月	0 歳～5 歳	現地校（幼小）	◎
5	女	韓国	3 年 8 か月	3 歳～6 歳	現地幼稚園	◎
6	女	タイ	5 年 9 か月	◇3 歳～9 歳	日本人学校	○
6	男	アメリカ	1 年 2 か月	◇8 歳～9 歳	現地校（小）	◎

◇印は帰国後 3 年未満 H 10. 9. 1 現在 29 名

名前後であるため、多人数の友達とどのようにつきあっていったらよいかにとまどいを感じたようである。2日目～1学期末では、生活面では、給食の経験が全くなかったOさんであるが、周りの友達に教えてもらったり、みんなのする様子をまねたりするようになってきた。トイレについては、和式トイレになじめず、どうしてもがまんできない時は、担任と共に洋式トイレを使用した。担任の感想としては、Oさんは、教師が考えていた以上に日本語の能力を付けており、友達との会話や学習時の発表など特に支障はなく、学校生活に随分なじんできた。授業中の態度は、当初じっと座っていることに戸惑っていたようである。しかし、7月からの指導の効果によってきちんと座っている周りの様子を見て、あぐら座りをしないで座ることができるようになった。ただ、聞く時と発表する時とのけじめができていないので、今後はその点に気をつけていきたいと思う、と述べている。「けじめ」とは、友人の会話を聞く時に彼女が発言を求めることを意味していると思われる。教師の方が、「その点に気をつけていく」ということは、彼女が受けた教育そのものの否定になる可能性が高い。日本の教育への適応は、Oさんの自己否定になるのである。

表2の国際理解教育の3つの方針A豊かな社会性を持つ子(共生していく態度)、B主体的に表現できる子(実践的な能力)、C違いを認め理解できる子(多様性の理解)をみると、国際理解教育の基本が述べられている。しかし、Cの「異文化の理解と尊重」の「他国、多民族、多文化について理解する。ものの見方や価値観の多様性についても理解し尊重していこうとする」や「相互理解」の「自分の考えをしっかりと持ちながらも、相手の考えも理解してい

表2 国際理解教育の3つの方針

A 豊かな社会性を持つ子(共生していく態度)

人権、生命の尊重

- ・他人の考え、ものの見方、感じ方を理解し尊重しようとする。
- ・人間や生命の尊さに気付き、尊重しようとする。

協力、協調の重要性

- ・個性豊かな集団での多様な行動を受け入れようとする
- ・国際協力、国際協調について理解し、実践していこうとする

平和、友好の態度

- ・世界的な視野に立って、全ての人々と仲良く平和な社会をつくろうとする

環境への関心

- ・自分の生活を通して環境問題に関心を持つ。

B 主体的に表現できる子(実践的な能力)

コミュニケーション能力

- ・自分の意見や考えを持ち、それを相手に正しく伝えたり、相手の意見や考えを正しく受けとめたりする。

自己表現力

- ・自分の意見や考えを言葉や動作などの様々な方法で、明確に相手に伝える。

主体的な行動力

- ・興味を持った身近な問題や活動について、進んで調べたり参加したりする。

思考力、判断力、想像力

- ・その場の状況に応じて自分の見方や考え方を持ったり、正しく判断して行動したりする。

C 違いを認め理解できる子（多様性の理解）

自国文化の理解と尊重

・日本の文化、伝統、慣習について理解し尊重する。また、自分たちの住む地域についても理解していく。

異文化の理解と尊重

・他国、多民族、多文化について理解する。ものの見方や価値観の多様性についても理解し尊重していこうとする。

相互理解

・自分の考えをしっかりと持ちながらも、相手の考えを理解していこうとする。

世界の現実の理解

・地球規模の環境、食料、資源問題などを理解していこうとする。

こうとする」点でも、教師がしっかりとこれらの点を理解し、子どもの個性を押さえつけないことが求められるのである。

(c) 異文化を持った子どものための国際理解教育

表3は中国からの帰国生の小学校、中学校別総計であり、図1は日本語指導を必要とする外国人児童・生徒数の比率を示している。中国から帰国した子どもたちは、中国残留孤児の孫

表3 中国引揚児童生徒在籍数⁵⁾（平成10年5月1日現在）

(1) 小学校

	学 校 名	1年	2年	3年	4年	5年	6年	計
1	西 舞 子		2	4		1		7
2	多 聞 東		2					2
3	神 陵 台	1	4	7	11	8	5	36
4	北 山		1				1	2
5	出 合			1		1		2
	合 計	1	9	12	11	10	6	49

(2) 中学校

	学 校 名	1年	2年	3年	計
1	住 吉			1	1
2	神戸生田			1	1
3	多 聞 東			1	1
4	舞 子			1	1
5	神 陵 台	5	4	8	17
	合 計	5	4	12	21

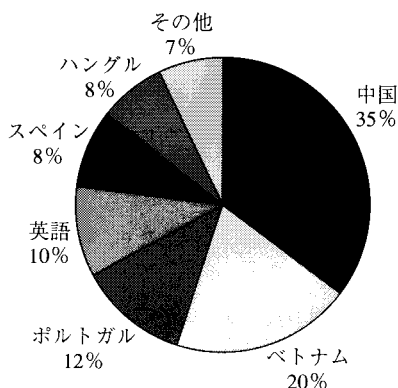


図1 日本語指導を必要とする児童生徒の母国語

たちであり、彼らは日本語をほとんど理解していない。ベトナム語を話す子どもたちは、ベトナム難民の子どもたちであり、ポルトガル語、スペイン語を話すのは日系中南米人であると推測される。

次に中国からの帰国生 C さんと E さんの事例を紹介してみる。

中国帰国児童 C さん (小 2) D 小学校

C さんは、中国で育った。少しの間は日本の幼稚園に在籍していたが、就学前の 1 年間で中国で過ごした。そして、入学式の前日から日本へ来て、本校で学校生活を送っている。入学当初は、全く日本語が話せなかったが、元々積極的に行動する性格であったことがよかったのか、1 年間の在籍で日常の会話は、日本語でできるようになった。C さんが日本語を覚えながら、日本での学校生活に適應していく中で、同じクラスの子どもたちも、C さんを通じて簡単な中国語を教えてもらい、中国についての理解を深めた。C さんから中国語を切り離して、日本語を覚えさせるのではなく、C さんとクラスの子どもたちとの相互理解を図ったことにより、適應がスムーズになった。

中国人 E さん (中学 3 年生) F 小学校

E さんは親の仕事の都合で日本に来て 2 年になる。とてもおとなしくまじめな性格であるが積極さにやや欠ける。もっと前向きな性格が身に付くと日本語の習得にもより進歩が見られるはずである。

C さんは小学校 2 年生、E さんは中学校 3 年生である。これらを見ると C さんと E さんの個人差のように見えるが、C さんは小学校 2 年生であり、E さんは中学校 3 年生であり、この年齢差も適應の違いに影響を与えたのではないだろうか。一般的に 10 歳以下は、適應が比較的スムーズであるのに対し、10 歳以上、特に中学生での帰国は、適應に困難が見られるそうである⁷⁾。

3 在日外国人の教育実践

大阪府、大阪市には数多くの在日外国人たちが居住している。それらのうち、在日韓国・朝鮮人の人たちが占める割合は大きい。彼らは、国籍は韓国、朝鮮籍であったり、日本籍であったりまたは両方の国籍を持っている。しかしながら、朝鮮半島の文化を身につけ、日本社会の中で生活している人たちである。ここでは、(1) 外国人学校、(2) 大阪府、大阪市の教育委員会の基本方針、(3) 具体的に公教育の中で、つまり学習指導要領の下でどのように異文化を教えるべきかの実践例を述べてみたい。

（1）在日外国人学校

大阪府に位置する韓国学校、学校法人白頭学院建国幼稚園、小学校、中学校、高等学校について述べてみる。この学校は1条校であり、日本の学校指導要領に準じて教育が行われている。

1. 目標 本校は、日本の学校教育法第一条校の資格を有し、在日韓国人社会の指導的人物及び、21世紀に活躍する国際人の育成を目指している。
2. 一貫教育 小・中・高12年間一貫して教育を行い、幼稚園・小学校より多言語（日・韓・英）教育を実施している。
3. 方針 進学教育・民族教育を両立させる。そのため中学・高校では韓国語・韓国の歴史の学習はもちろんのこと、特別進学コース等を設けている。
4. 活発なクラブ活動 庭球部（全国大会14回・インターハイ2回出場、全国大会優勝1回）、サッカー部（大阪府優勝3回）、書道部（文部大臣賞2回）、中学ESS部（英語検定2級・3級合格者）等

幼稚園では「明るく素直で元気な子」に育てるため、「はだかんば体操」やリズム教育に力を入れている。「21世紀で活躍する子ども」に育てるため、多言語教育（韓国語・日本語・英語）を行っている。カリキュラムは表4に示している。教育内容は日本の幼稚園とほとんど同じであり、「韓国語」「音楽リズム」「舞蹈」がこの国の特徴である。小学校では日本の小学校と同じ教科の他に、韓国の国語・歴史・文化を学び、一人一人の個性を伸ばすとともに「考

表4 幼稚園カリキュラム⁹⁾

曜 時	月	火	水	木	金	土
10:00 10:25	音楽集会	クラス集会		体育集会	クラス集会	
10:30 10:55		日本語	絵 画		絵 画	社 会
11:00 11:25		韓国音楽			健 康	英 語
11:30 12:55	給食・自由遊び					
13:00 13:30	日本語	自 然 (数)	韓国語	音 楽 リズム	日本語	降園準備
13:40 14:10	健 康			舞 踏	戸外遊び	降 園
14:15 15:00	降園準備					

表 5 小学校カリキュラム¹⁰⁾

学年別 教 科		1		2		3		4		5		6	
		基準	現況	基準	現況	基準	現況	基準	現況	基準	現況	基準	現況
特設教科	韓 国 語		136		140		140		140		105		105
	韓国社会										35		35
各教科・授業時数	国 語	306	306	315	315	280	280	280	280	210	210	210	210
	生 活	102	102	105	105								
	社 会					105	105	105	105	105	105	105	105
	算 数	136	136	175	175	175	175	175	175	175	175	175	175
	理 科					105	105	105	105	105	105	105	105
	音 楽	68	68	70	70	70	70	70	70	70	70	70	70
	図画工作	68	68	70	70	70	70	70	70	70	70	70	70
	家 庭											70	70
	体 育	102	102	105	105	105	105	105	105	105	105	105	105
道 徳 時 間		34	34	35	35	35	35	35	35	35	35	35	35
特 別 活 動		34		35		35	35	70	70	70	70	70	70
課 外 (英 語)			34		35		35						
規 準 授 業 時 間		850	816	910	875	980	1015	1015	1015	1015	1015	1015	1015
総 授 業 時 数			986		1050		1155		1155		1155		1155

表 6 中学校カリキュラム¹¹⁾

学 年 別		1		2		3		超 過 時間数
科 目		基準	現況	基準	現況	基準	現況	
特設科目	韓 国 語		3		3		3	
	韓 国 地				1			
	韓 国 史						1	
必 須 科 目	日 語	5	6	4	5	4	6	4
	社 会	4	4	4	4	2～3	3	
	数 学	3	5	4	5	4	5	4
	理 科	3	4	3	4	3～4	4	2
	音 楽	2	1	1～2	1	1	1	-1
	美 術	2	1	1～2	1	1	1	-1
	保 体	3	2	3	3	3～4	2	-2
	技 家	2	2	2	2	2～3	2	
道 徳		1		1		1		-3
特 活		1～2	1	1～2	1	1～2	1	
英 語		3	5	3	4	4	5	4
総時間数	基 準	30		30		30		
	現 況		34		34		34	

日本における多文化教育の実態と今後の課題（田中圭治郎）

表 7 高等学校カリキュラム¹²⁾

科目	数	必選	1			2			3		
			D	A	B	D	A	B	D	A	B
韓国語	9	必	3	3	3	3	3	3	3	3	3
韓国史	3	必	1	1	1	1	1	1	1	1	1
韓国地理	1									1	1
国語 I	4	必	6	4	4						
国語 II	4					4	2	2	2	2	2
国語表現	2								2	2	
現代文	4						2	2	[A]3/数 B [I] C [2]	2	2
古典 I	3					2/物 B	2	3	[B]物 B [I] 化 B [2]	2	2
古典講読	2								4		
日演						3/数 A			[C]4/物 B 数 A		
世界史 B	4		2			2	3	3		2	2
日本史 A/B	2/4					2				2	2
地理 A	2	必								2	2
倫理	2	必	2				2	2	[D]数 II [I] 数 B [2]		
政経	2	必	3	4	4						
世演									[E]3/ 数 II		
社(在日史)演										2	2
数学 I	4	必	5	5	5						
数学 II	3					3	3	3		古 1/2	
数学 III	3								[D]倫 [I] [E]世 [3]/4		
数学 A	2								[C]日演 /2		
数学 B	2								[D]倫 [I] [A]現 [1]/2		
数学 C	2								[A]現 /2		
H . R .			1	1	1	1	1	1	1	1	1
商業経済											3
総合理科	4	必	4	4	4						
物理 IB	4					占 I [2] 英 [1]/3			3/[B]古 [I] [C]日 [2]		
化学 IB	4					2			2		
生物 IB	4					2	2	2	3	2	2
化学演									[B]1/ 化 B		
体育		必	4/(2)	4/(2)	4/(2)	4/(2)	4/(2)	4/(2)	3	3	3
保健		必	1	1	1	1	1	1			
音楽 I		必	1	1	1	1	1	1			
美術 I		必	1	1	1	1	1	1			
硬筆 I								2			2
英語 I	4		6	5	5						
英語 II	4					4	4	4	2	2	2
リーディング	4					3	3		2	2	
ライティング	4								6	5	4
英語演習						1/物 B					
家庭一般			(2)	(2)	(2)	(2)	(2)	(2)			
合計			40	34	34	40	34	34	40	34	34

え・わかる」勉強を徹底的にさせている。カリキュラムはむしろ表5に示している。日本の学習指導要領の教科プラス「韓国語」「韓国社会」の特設教科が加えられている。中学校では「わかる授業を楽しく」を基本姿勢として、一人一人を細やかに指導(1クラス30人制)し、その他に、進学教育と民族教育を両立させるため、早朝授業として、週5回の小テスト、放課後学習を徹底している。夏休みには、一週間の林間宿舎で学習合宿を行う。英語・数学・日本語については公立校より授業時間数が多い。カリキュラムは表6に示している。高校でのカリキュラムは表7であり、「国語(日本語)」は、人格形成、大学入試の根幹教科として捉えている。1年次に特進コースは国語Ⅰをじっくり修得し、学年の進展に伴い、各コースで文・理・就職の希望コース、クラスの特質にあわせた学習カリキュラムを編成している。1～3年を通じ毎学年、当用漢字、常用漢字、就職、入試漢字の完成修得を目指した校内漢字級数試験を実施し、各学期ごとに各級、実力に応じ級数認定状の表彰を行っている。また、「数学」は、数学Ⅰの入試に占める重要性から、標準コースでは第2年次にも引き続き数学Ⅰ・数学Ⅱを学習し、第3学年に入試コース別に数学Ⅱの選択と就職コースBの数演を学習する。特進コースでは、入試に向けた数学演習と、文・理コースの選択として、微分・積分・統計・確率(数Ⅲ・A・B・C)の選択授業を行う。さらに、「英語」特進コース、標準コースの進学組では、第2年次に英語Ⅰ、英語Ⅱの完全マスターを目指し、第3学年に向けた演習・問題集に取り組む。特進コース、標準コースの入試、試験組の各クラス、3年時のカリキュラムが進路希望によって各々異なった編成の上で授業を幅広く行い実力の向上を図る。最後に「韓国語」は、韓国語の習熟能力に合わせて、韓国の大学を目指し、高い能力を持った上級班、中程度の力に合わせた中級班、はじめて韓国語を習う初級班を1～2班の4～5クラス編成で学習を行う。10～30名以内の少人数クラス編成で、学習能力の効率を図っている。

高校段階にはいると、日本の大学準備教育のため、「韓国語」「韓国史」の比率が少なくなっている。この学校での教科の「国語」は日本語であることからわかるように、韓国人としてのアイデンティティを持ちながらも日本への適応を志向していることがわかる。次に『P. T. A. 会報』を見ることにより、教師、保護者がこの学校をどのように考えているのかを考察する。

「建国には民族学校という特性から、実に様々な生徒が入学してくる。学校と勉強の好きな子、嫌いな子、スポーツの得意な子、不得手な子、しかしどの子もその子なりの良さを持っている。その良さをのばすため一人ひとりの生徒にあった加減を見つけて、味のある人間に育てることが教師の仕事であり、民族学校に課せられた責務、と考えられている」¹³⁾、という教師の言葉は、日本に居住する韓国籍の子どもたちの生き方が模索されていることを示している。また一母親は次のように述べている。

「私たちは、自分の子どもが学齢期に達したとき、まず日本の学校に入れるのか、民族学校に入れるのか、選択を迫られる。私の夫は日本人ですが、『意識して民族教育をしないと、子どもは日本に同化してしまう』という考えから、民族学校に入れることを決めていました。心

が揺れ動いたのは寧ろ私の方でした、というのも民族学校でも韓国系と共和国系のどちらを選ぶのかで悩まされたからです。結局、家から近いこと、私の母校と言うことで建国に入学させました。小学校では子どもの個性を尊重して下さる先生方に会って子どもはのびのびと成長しました。本当に感謝しております。そして私自身は建国が民族学校弾圧の嵐の中を生き抜いた学校だということにも誇りを感じております。日本における民族学校の歴史を体現している学校です」¹⁴⁾。彼女の発言からわかるように、朝鮮民族の文化をいかに大切に考え、自分の子どもたちに伝達することが親の責務だと考えていることが、推し量られる。

（2）大阪府・大阪市の教育委員会の基本方針

大阪府教育委員会が出した「在日韓国・朝鮮人問題に関する指導の指針（改訂）」（平成10年度）と大阪市教育局が出した「在日外国人の幼児・児童・生徒の教育指導資料」（平成6年）について述べてみる。

「在日韓国・朝鮮人問題に関する指導の指針」（改訂）

大阪府教育委員会は、国際化を迎え、異文化を持っている子どもをどのように学校現場に受け入れるかに大きな努力を重ねてきた。「在日韓国・朝鮮人の問題については、日本と韓国・朝鮮を巡る近代以降の歴史的経緯や社会的背景のもとで生み出されてきた偏見や差別が、日本人の児童・生徒の在日韓国・朝鮮人に対する意識形成や行動様式に影響を与えるとともに、在日韓国・朝鮮人児童・生徒にとっても自らの誇りや自覚を身につけることが困難な状況を生み出したきたと考えられる」、と述べ、在日韓国・朝鮮人の子どもの教育が自分たちの足下を見つめた異文化理解教育であるとした。「これらの問題を解決するためには、日本人児童・生徒に在日韓国・朝鮮人問題を正しく理解させ、差別や偏見をなくすよう努めるとともに、在日韓国・朝鮮人児童・生徒が強く生き抜こうとする態度を育てることが大切である」とし、以下の4点に配慮しなければならないとしている。

1. 全ての児童・生徒に対し、在日韓国・朝鮮人児童・生徒が在籍している歴史的経緯や社会的背景を正しく認識させるとともに、朝鮮半島の文化や歴史についての理解を深めさせるように努めること。
2. 在日韓国・朝鮮人児童・生徒が本名を使用することは、本人のアイデンティティの確立に関わることである。学校においては、全ての人間が互いに違いを認め合い、共に生きる社会を築くことを目標として、在日韓国・朝鮮人児童・生徒の実態把握に努め、これらの児童・生徒が自らの誇りと自覚を高め、本名を使用できるよう指導に努めること。
3. 在日韓国・朝鮮人児童・生徒が将来の進路を自ら選択し、自己を実現し得るよう、進路指導の充実を図るとともに、関係諸機関との連携を密にし適切な指導に努めること。
4. 在日韓国・朝鮮人問題の指導の推進を図るため、教職員研修の充実にも努めること¹⁵⁾。

これら4点から言えることは、日本と朝鮮の歴史的なつながりを理解し、在日韓国・朝鮮人の子どもたちが持っている文化的遺産を尊重し、彼らが通常使用している日本名(通名)を否定し、彼らの本名を学校、社会の中で認めあうことが必要であるとする。彼らが本名を名乗れないのは、日本人の韓国・朝鮮人に対する偏見・差別が存在することであると言うことを広く認識する必要がある。

次に大阪市教育委員会の「在日外国人の幼児・児童・生徒の教育指導資料」について述べてみる。「大阪市には、歴史的経緯により、各校園に多くの在日韓国・朝鮮人の幼児・児童・生徒が在籍している。この幼児・児童・生徒にとって韓国・朝鮮を正しく理解し尊重するとともに、民族としての違いを認め、共に生きようとする正しい人権感覚をはぐくむ教育として重要である。従って、人権尊重の教育の視点からも、全市校園において、この教育の意義・目的を踏まえた実践の一層の深化と充実が図られなければならない」という大阪市の方針のもとに在日外国人教育の充実のためにこの資料が出されている。学校教育における指導を推進するためには、「日本人の幼児・児童・生徒に対し、国際友好の資質と態度を育成するには、どのようにすればよいか」が求められる。日本人の幼児・児童・生徒の中にある民族偏見と差別意識を排除し、ともに学ぶ在日外国人の幼児・児童・生徒の立場を理解することのできる集団の育成に努めることが大切なのであり、そのためには(a)(b)(c)(d)(e)の対応が必要である。

(a)「韓国・朝鮮(人)を正しく処遇する社会をつくる」

西洋偏重の思想は、マスメディアによって作られる子ども文化の中にもあり、「カッコいい」というような価値観で定着している。教職員が、子どものこのような意識に着目すれば、例えば、中学校のALT導入では、英語科で出会う外国人と日本語を話す身近な外国人(在日韓国・朝鮮人)に対する生徒の意識の違いが把握できる。教職員はこのような状況を踏まえて、「国際理解の基本は、それぞれの外国をきちんと見ること、つまり、一番身近な外国をきちんと見ることから始まる」ことを認識し実践していくことが必要である。

(b)「在日韓国・朝鮮人の思いを大切にしていこう」

何よりも大切なことは、身近にいる韓国・朝鮮人の子どもたちの思いに寄り添って実践を進めることである。家庭訪問も必要である。その家庭では、民族を明らかにする子どもたちも出るかもしれない。在日韓国・朝鮮人が民族を明らかにできる社会であることが、真の国際社会への第一歩なのである。

(c)「本当の韓国・朝鮮と出会う場をつくる」

子どもたちは日常生活の中で、偏見に満ちた韓国・朝鮮との出会いが多く、マイナスのイメージを持ちがちである。従って、豊かな韓国・朝鮮との出会いを教育現場でつくること、子どもたちに正しい韓国・朝鮮観を形成することのスタートとなる。特に、幼少の時期から、自然で前向きな異文化との接触の機会を積極的につくっていくことが大切である。子どもたちが生活の中で偏見、差別を体験し蓄積していく状況に対応しては、単に知識を学ぶ

だけでは不十分であり、体験や感動を以て学ばせることが肝要である。教材は、文化面が導入しやすく、民話、歌、踊り、行事、食べ物、衣装、習慣、言語、地理等を、幼児・児童・生徒の発達段階や地域性を考慮しながら選ぶ必要がある。実践において在日韓国・朝鮮人の友達の生き生きとした様子があれば、理解は一層深まるものである。

(d)「日本と韓国・朝鮮人との交流の歴史を正しく知る」

歴史においても「いつも攻められていた国」と言った誤った韓国・朝鮮観に陥らないように史実に基づいて正しく歴史を教える必要がある。古代からの長い友好の歴史（古代文化の伝来、江戸時代の朝鮮通信使等）と日本の侵略の事実とそれに立ち向かう歴史があった。明治以降では、日本の植民地支配による韓国・朝鮮人に対する同化政策とともに、韓国・朝鮮人の民族を取り戻そうとする歴史があった。また、在日韓国・朝鮮人の歴史では、戦後の民族教育への運動等を通して、民族としての努力や成果、民族としてのたくましい生き方があった。これらの歴史学習を通して、日本社会の課題をつかみ、アジアの一員として諸民族と友好・平和に気付くことの大切さを学ばせることが必要である。

(e)「日本人の課題としての在日韓国・朝鮮人問題」

日本人が、在日韓国・朝鮮人問題を学ぶと言うことは、日本の歴史を正しく知り、今後の日本のあり方を考え、自分の生き方を考えさせてくれる。例えば、在日韓国・朝鮮人の思いや痛みを学ぶとき、日本人の偏見や差別が人々を苦しめてきたことを知ることになる。身近な（学級や地域の）在日韓国・朝鮮人の事例であればあるほど、その思いは伝わりやすい。今なお、民族差別が根深くあることや異文化への排外意識が身近な生活の中にあることに気付き、個人として、社会として、日本人が自らを振り返り、「何が足りなかったのか」「何をすべきか」等を、自らの課題として明らかにしていくことになるからである。日本人と在日韓国・朝鮮人が互いの思いを交わしながら、身近なところから、その課題の一つ一つを、一歩一歩解決に向かって実践していくことが求められている。

(3) 小学校における異文化理解教育の実践

小路小学校では 1951 年に、外国人講師の担当による民族の言語文化の学習を目的とした民族学級が開かれ、現在も 5 年・6 年の在日韓国・朝鮮人児童を対象にハングルや歌の指導がされている。1983 年、民族学級に加えて、大阪市教育指針の柱 I・IV を踏まえ、同和教育の一環として、日本人児童の視野を広げ、善隣友好、国際親善を目指す、国際人を育てることを目標に、5 年・6 年の日本人児童に国際理解の学習を始める。国際理解の学習と民族学級は、同じ時間に行われ、在日韓国・朝鮮人の児童は、民族学級で学習をし、日本人の児童は国際理解の学習を行う。月に 1 度、第 4 週の金曜日だけ、相手の学習を知り合うために、合同国際理解の時間を設けて、一緒に学習をしている。次に具体的に述べてみる。

国際理解教の年間指導目標

1年

- ・学級の中に、日本人と韓国・朝鮮人が、ともに学習していることに気付かせる。
- ・韓国・朝鮮人児童の中には、2つの名前を持っている人がいることを知るようにさせる。

2年

- ・小路小学校では、日本人と韓国・朝鮮人の子どもが、一緒に勉強している。家族の仕事やいろいろの事情で日本で暮らしているために、日本の学校で勉強している。そして、日本での名前を、本国での名前の他に持っていることを知らせる。
- ・世界の国々は、言葉や服装、生活の仕方は異なっているが、互いに仲良く助け合って生活している。特に隣にあって、昔から行き来の盛んな韓国・朝鮮と日本とは人々が幸福で平和な生活が送れるよう、互いに協力しなければならないことを理解させる。

3年

- ・大阪には韓国・朝鮮人が大勢暮らしていることをわからせる。
- ・在日韓国・朝鮮人の生活の様子が日本人の生活と少し違いがあることを友達の話などから理解させる。
- ・歌や民話を通して、韓国・朝鮮の文化に触れさせ、お互い自分の国の持つ意味について考えさせる。

4年

- ・日本と韓国・朝鮮の生活や風俗、習慣の類似点、相違点に気付かせる。
- ・日本と韓国・朝鮮の地理的、歴史的関係を知り、互いに協力することの大切さを理解させるとともに、自分たちにできることを考えさせる。

5年

- ・日本と韓国・朝鮮の自然、文化、風俗、習慣の類似点や相違点を学習し、互いの生活に対する理解を求める。
- ・日本と韓国・朝鮮の産業経済上のつながりや文化交流の様子を歴史的に捉えさせ、今後の自分たちのあり方について考えさせる。

6年

- ・歴史的学习と平行して、日本と韓国・朝鮮の古くからの友好の歴史を学ぶ。一時期、暗い不幸な出来事があったが、これに目をつぶるのではなく、発達段階を考慮しながら、正しい認識が育つようにする。
- ・基本的人権を尊重するという本市教育の理念を踏まえ、在日韓国・朝鮮人をふくむ人々への民族的差別事象に対する正しい見方、考え方を養う。
- ・21世紀に生きる子どもを育てるため、民主的な社会を形成する集団意識を育て、国際連帯意識の基礎を養う。

これら1年生から6年生まで、各学年に応じた教育内容が用意されていることがわかる。1年生では、日本の名前と韓国・朝鮮の名前が存在することを子どもたちに認識させ、6年生になると両国の歴史的交流を学習させる。6年生の指導計画例（4月～3月）を見ると、国際理解教育の視点から、広く世界の国々に視野を広げた、より質の高い教育が求められている。

○指導計画例（6年）

月	単 元	指 導 目 標	時間	関連
4	民族学級・国際理解 その意義と役割	5年生で風俗、習慣等の分野より学習したことを想起させ、民族学級や国際理解の時間の意義と役割について考えさせる。	2	特活
	日本と韓国朝鮮	6年生では、歴史学習と平行して、国際理解の学習をすすめるが、特に日本と韓国朝鮮とのつながりについて学ぶものであることを知らせる。	2	社会
5	大陸文化の伝来（韓 日交流二千年）	日本と韓国朝鮮の遺跡や文化財を比較し、共通している点の多いことに気づかせる。高松塚古墳をはじめ日本には韓国朝鮮から伝わったものが多いことを学ばせる。	2	社会
	渡来人と日本文化 （社会）	王仁博士の「漢字二千年」の話を参考に、日本文化が発展するその土台として、渡来人の力があつたことを知らせる。	2	社会
6	飛鳥文化と韓国朝鮮 （サラム生活編）	京都太秦広竜寺の弥勒菩薩と韓国の金銅弥勒菩薩の写真を比べ、似ていることに気づかせ、この時代の文化交流について学ばせる。	2	社会
	生野における渡来文化の跡（自作プリント）	生野区の渡来文化をたずねるフィールドワークを実施し、私たちは身近な生活の中に古代韓国朝鮮との結びつきを持つものであることを知らせる。	2	特活
7	豊臣秀吉の「朝鮮出兵」（お話日本歴史） 日本の焼き物を支えた陶工たち	「文祿の役」「慶長の役」を侵略の視点でとらえさせる。京都にある「耳塚」を紹介し、日韓交流二千年の歴史の中で不幸なことであることを知らせる。 伊万里焼、唐津焼など有名な焼き物は、韓国朝鮮から渡来した陶工によるものであることについて知らせる。	2	社会
9	朝鮮通信使（映画）	「朝鮮通信使」の歴史的事実を知り、「通信」に、「信を通じあう。」という友好の意味があることに気づかせる。	2	社会
	鎖国の日本（社会）	鎖国をしていた日本の世界の国々との関係や、日本人の意識「島国根性」について考えさせる。	2	社会
10	明治維新と富国強兵 （自作プリント）	明治維新のようすを社会科学習を想起しながら「征韓論」を中心に学習する。ただ、このころの日本民衆は「女工哀史」にみられるように同じくしいたげられた存在であったことをわからせる。	4	社会
11	韓国併合（お話日本歴史）	日本史配属のとった誤った政策と韓国併合という暗い不幸な事実を目を向けさせる。	2	社会
	関東大震災と朝鮮人 虐殺（社会）	日本軍部の横暴は関東大震災を朝鮮人の陰謀だとデマを流し虐殺するに至った。同時に日本の社会主義者なども虐殺されたが、軍部のねらいは何であったかを考えさせる。	2	社会
12	強制連行	日本と韓国朝鮮の間の暗い時期の歴史的事実として「強制連行」がありその産物として近くの平野川分水路があることを知らせる。	2	社会
	ハラボジ・ハルモニ の話（テレビ）	在日一世の韓国・朝鮮人のおじいさんおばあさんの苦労話や楽しかった思い出話をきき小路地区に生きる私たちの生活をふりかえらせる。	2	道徳

月	単 元	指 導 日 標	時間	関連
1	基本的人権と在日韓国・朝鮮人(社会) 消えた日の丸	社会科学習の延長として基本的人権と在日韓国・朝鮮人の人達の諸権利について考えさせる。	2	社会
		1936年ベルリンオリンピックのマラソンで優勝した孫基禎選手の胸には日の丸があった。それを報じた東亜日報は印刷から日の丸をはずした。	2	国語
2	「イルム」(なまえ)(TV VIR) 自分のなまえ(国語教科書)	在日朝鮮人2世朴秋子さんの本名宣言。朴さんは日本人を夫にもつ婦人であるが、就職の面接の際なぜ通名を使わぬかといわれる。というテレビVTRを見て考えさせる。	2	社会
		「わがおいたちの記」をつづらせる中で、自分の誕生のころの話の保護者より取材させる。	2	社会
3	世界の国々(社会) 民族学級国際理解の学習の反省	社会の「日本と世界」の単元と関連して児童の意識調査をする。昭和57年にとった調査と比較して今後の調査を意識化させる。 5・6年で学んだことを今後の生活で生かすことを話し合わせる。	2	社会

4 国際理解教育の今後の課題

——多文化教育の視点から——

一人ひとりを生かすことが教育の本質であるとすれば、多文化教育は、いろいろな人たちの価値観を認めあるため、日本の学校教育に積極的に受け入れなければならないものであろう。外国人の人たちを学校に講師として招き、彼らの異文化に直接ふれること、外国で教育を受けた帰国生の個性を日本の教育現場の中で生かすこと、中国やベトナムや中南米からやってきた子どもたちを学校で受けとめること、最後に在日韓国・朝鮮人の子どもたちが持っている文化を尊重し認めあうことは、多文化的社会になりつつある日本において、避けて通ることができない大きな問題である。相手を認めあうことは、自分を客観的に見つめることであり、それは自分の長所、短所を発見することである。短所をなくすことは自己変革を求めることである。その際われわれは自分自身に大きな苦痛を感じ、そこからのがれようとする。苦しみを積極的に受けとめ、より高い価値へと志向する努力こそがブーバーが言う「我と汝」の人間関係構築への手がかりなのである。

〔注〕

- 1) 神戸市小学校教育研究会国際理解教育部『平成10年度国際理解教育部のまとめ 第12号——地球時代を豊かにする子供の育成』、平成11年、20-30頁。
- 2) 神戸市立六甲アイランド小学校 平成9・10年度文部省帰国子女教育受入推進地域指定帰国子女教育・国際理解教育研究発表会『わたしたちみな地球家族——認めあい、高めあう子供を育てる』1998年5頁。
- 3) 前掲書、6-7頁。
- 4) 前掲書、9頁。
- 5) 神戸市教育委員会、神戸市帰国子女教育研究協議会、神小研、神中研、国際理解教育部『帰国子女

教育，国際理解教育の取り組み』1998年，13頁。

6) 前掲書，14頁。

7) 前掲書，18頁。

8) 9) 10) 11) 12) は『学校法人白頭学院建国小・中・高等学校ガイド』1992年より引用。

13) 14) 『建国 P. T. A. 会報』1992年12月21日より引用。

15) 大阪府教育委員会，『府立高等学校 在日外国人教育——実践事例集』平成10年，2頁。

16) 大阪市教育委員会，『在日外国人の幼児・児童・生徒の教育指導資料』平成6年，7-8頁。

17) 大阪市外国人教育研究協議会，『市外教研究のまとめ——1987年（昭和62年度）』1998年，25-28頁。

* 本稿は，「平成10年度佛教大学特別研究助成金」を受けた研究の成果である。

（たなか けいじろう 教育学科）

（1999年10月15日受理）